View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nagoya Gakuin University Repository

アブラハム・タッカーの道徳哲学 ： 自由意志について(2)

著者	大村 照夫
雑誌名	名古屋学院大学論集　社会科学篇
巻	45
号	3
ページ	1-14
発行年	2009-01-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000289

Copylight (c) 2009 大村照夫

名古屋学院大学論集　社会科学篇　第45巻　第3号（2009年1月）

アブラハム・タッカーの道徳哲学

――自由意志について(2)――

大　村　照　夫

目　次

Ⅲ　自由と意志

Ⅲ　自由と意志

「9．しかしながら，人は話したり考えたりする慣れた方法から逸脱できない。したがって彼らの概念に従って，その意志が休みなく何時間も何日も続く永続的行為を実行し，我々が別の時にやろうとすることを今やろうという意志の多様性を想像しよう。この見方の中で意志に対して抑制と自由を適用する余地が確かにある。というのは，意志の働きが功を奏する前に時間の経過とともに知覚されるその働きは何か他の要因によって阻害されたり，道筋をそれるからである。かくてもし私が朝に差し控えようと決めたことを午後にやれば，前の意志は同様に続いているが，私はある強制の下にあり，現在持つ意志は朝の決定とは違う意志であり，これが朝の決定を妨げる。

しかし我々の力を一度に一方向にのみ行使できるのは明らかであり，次のような矛盾した概念を享受しがちである。つまり我々の中に多様な意志を持ち，意志の一つは我々自身のものであり，たまたま気紛れな気分になると意志のうちの一つを評価する。時にはそれは愛好の意志であり，克己，意志の抑制，あるいはしたくないあるいは意志に反するつまり好みに反することに関係する全ての表現の中に取り入れられているにちがいない。しかし通常は我々の判断の決定を意志と理解する。というのは，この意志を持たない人は我々の中に一人もいないからである。というのは，もしそれが彼にその実行において何の困難も与えなく，愛好に反対する訳でもなく，どんなものも想像するならば，誰も彼の現在の判断が示す最良のものを行うことを拒否できないからである。したがって，これは必ずしも功を奏する訳ではないが，常に我々の中に存続する意志であるからである。

第三の意志，つまり選択の意志に関して他の二つの意志の間に争いがある場合このことが時折生じる。というのは，彼を引きつける愛好，あるいは彼を他の方向へ向ける不安無く，判断に反して行動を決心する人はいないからである。かくて同様に彼が何故差し控えなければならないのかという理由を見出せない場合，誰も彼の好きなことを行うのを差し控える決心をしない。理性と愛好が同じ方向に急き立てる場合，あるいは一方のみがせがみ，他方が全く静かにしている場合，これはしばしば生じることであるが，その心には一つの目的が提供され，その場合何らかの選択の余地は無い。

したがって判断や決心の意志は言葉の通常の属性においては我々の意志と評価される。我々の自由は意志に我々の行動の指示を阻止する何

らかの障害があるかないかに依存する。かくて聖パウロは，やりたいことをやらずやりたくないことをやる俗世の人間を説明する際にこのことを理解していた。彼はこれを惨めな束縛と正しく捉える。神の息子たちの栄光ある自由は，我々が主張するように勧めるが，全ての異常な願望や誘惑からの免除による以上によりうまく解説される。かくて我々の理性や義務が容易に推薦する何でも実行できる。」(9)

自由な行動には自由な意志が伴う。いくらやりたいことも意志がある強制によって阻止されれば目標は達成されない。人は阻害要因を回避して目標にたどりつく努力をする。その場合意志は自由な空間の中に置かれなければならない。意志は自由な心の中で自らの力を発揮する。自由のない所に意志の働きはない。したがって自由意志という言葉には何の抑制や抑圧も加わらない自由な心の空間を必要とする。

「10. しかし我々の判断が自ら静める抑制がある。我々は望ましいと判断する行動が生じる場合，より便宜であると判断するものを伴う場合もなされえない場合，そうする自由が無いと考える。かくて友人のために小さな善行を行うように頼まれる時に重要な仕事があると，仕事がなければ喜んで友人に親切にするのにと言って言い訳するにちがいない。

それは，別々に考察すると必然性の動機と呼ぶものつまり義務を生じる判断や優位なものの支配，健康への配慮，我々の保善，危害や損害の回避にとって望ましい物事に対するこの反対である。つまり，もしこれらの障害が途上に立ちふさがっていなければ，我々が望むあるいは我々の判断が選ぶ以外の方向にしばしば行動するように我々を強いる全ての物事である。しかしこの種の必然性はかなり不安定な用語である。同様な事例は，別の見方においては存在しない一つの見方における判断と評価される。

印鑑を持つ人は強制的に手を動かす。そして手は同じような熱烈さで彼の地所の譲渡証書に押すように押しつけられ，この手は誰の目にも必然的と考えられる。しかしそこでは捺印は，そこで用いられた印鑑の行為というよりも単なる彼の行為にすぎない。というのは，両者の行為は自由と呼ばれうる何ものも伴わない衝動によっているからである。

しかし彼の手が自由になっても，彼が判こを押すまで彼が部屋に閉じ込められ，食料も水も無く，脅されるとどうなるか？　恐らく彼は妻や子供を持っている。彼らは地所を失い，路頭に迷うにちがいない。彼は決心の固い人なので，彼らを崩壊に導くよりも立派に死を決断する。この惨めな状況の中で彼はだらりと窓にもたれかかる。そこで彼は親しい友人や法律家を見かける。彼らは彼に損害が発生しないように法的措置をとることを忠告する。そこで彼は証書を回収し，捺印し直し，免責を得る。哲学者はこれが必然の行為であるとは認めない。というのは，それは彼の力の中でさし控えたことであるから。彼は友人の忠告が彼の判断を変えるまで，実際には差し控えた。彼は家族に損害を与えることなく，彼の命を救うという思慮ある動機に基づいて自発的に捺印することを決心した。被授与者はウエストミンスターホールに土地不動産の回復訴訟を起こす。そこでは全ての訴訟は上記のように証拠に基づいており，判事と陪審員は証書は無効と判決する。というのは，当該者は強迫の下にあり，彼の行為は自発的ではなく力により強いられたものだったからである。かくて同様な行為は法律上の構図において必然的であると判断される。これは哲学上は自由で自発的であった。

さて事例を少し変えて，監禁が合法的な負債

のために公共の牢獄の中であると想定しよう。当事者は支払手段が無く，保釈金を入手する信用もない。誰かが彼の家に隣接する農場の購入を申し出る。彼が農場を手放すのは非常に不都合であろうが，彼は自分の健康が虚弱であると考える。もし牢獄に留まると間違いなく死ぬであろう。かくて彼は自分を救い出す唯一の可能な手段としてその依頼を受け入れる。もし彼が後に軽はずみな取引のために責められても，彼を駆りたててそうした用務の必然性を主張する。この申し立ては十分な弁解として容易に認められる。彼は立ち退くと代金の払い戻しを申し出て，所有権の引き渡しを拒否する。彼が置かれた必然性を強調すると，この弁護は彼には有効ではないと思われる。というのは，法廷の答えは次のようであるから。つまり，彼の行為は自由で自発的であり，彼がそうした時決して強制されたものではないからである。したがって，彼の行為は法にかなったものであるにちがいない。

もう一度我々の状況を変えて，当人が何の制限も負債もないと想定しよう。しかし彼は町のとある女が好きになった。彼女は浪費にかけるかなりな額のお金を欲しがっており，彼が上に言及された農場を売る以外に何の手段も無く彼女に貢ぐことができなければ，彼を捨てて他の伊達男に向かうだろう。彼は彼女の誘惑に負けてしまい，彼女無しには生きていけない。かくて彼はかなり好みや判断に反しているが譲渡を実行する。彼はこの馬鹿げた処置の言い訳として必然性を弁護しがちである。しかし第三者は誰もそれを認めない。ここでは誰もその名称で呼ばないが，必然の人とは見なされない。

しかし必然性は常に自由意志に対立するので，これらの用語の変動性は用語を検討する光に従って雄鳩の首の羽の適切な色に関する哲学者の間での古くからの討議のような我々の間での注目に値する議論を引き起こす。哲学者の議論はその鳥のあらゆる微かな動きに様々な光景を提供する。」(10)

自由意志を阻害する大きな要因は必然性である。例えば不当に監禁された人には譲渡証書への捺印は無効である。しかし負債を背負う人が健康上の理由から地所を手放さざるを得ないのは必然性の結果である。病弱な彼は一刻も早く病院に入らないと死んでしまう。

伊達男は女のためにお金を用立てるために地所を売る。この自由意志は彼の女好きの結果であり，地所を手放すことは彼の意志に基づいており決して強制や抑圧の結果ではない。彼はお金を好きな女に貢いだからといって，地所の返還を裁判所に求めても無効である。

「11. 誰もが自由を道徳の基準と考える。というのは，手助けできないものを実行したり自由に行えないものを省略することは，誰にも賞賛にも非難にも値しないからである。我々には目上の人の命令でものごとを行うと間違いない。しかしこれは我々自身の発意に基づいてそれを行うと非難される。そこで必然性が法則を持たないというのが受け入れられた格率である。しかし我々の不道徳によって我々に課された制限は我々を弁護するものでない。道徳上の罪を犯した奴隷は専制君主に服従して彼が行う簡単な骨折り仕事に対して常に答えられると思われる。他方我々の宗教や義務の必要な命令に従うことは賞賛に値する。

しばしば既に述べられたように我々は無力の概念と自由の欠除を一つに混ぜ合わせ，他方から生ずるものを一方のものに帰する。そこで実に後者はいくらか前者に依存している。というのは，我々の途上にあるどのような障害も，もし我々の力がそれに打ち勝つほどに強くなるな

らば，無くなるだろうからである。しかし我々はその妨害から自由であるべきである。手足を縄で縛られた人はサムソンの力を彼に与えると，縛られても自由を回復するだろう。我々の手についた蜘蛛の巣状の怪我は，蜘蛛の巣は蝿の自由を破壊するが，自由の減少を生じさせない。蜘蛛の巣が蝿の足を拘束するように我々の指を拘束するというのではなく，抵抗は我々のより強い力と比較して何もないからである。

ある好みの感情が心を捉え，我々の現在の判断では認められない行動に駆り立てる時，心の働きが無力な中で行動すると言われる。誰も抵抗できないような誘惑に流されるのは，人間の性格の弱さに帰する。名誉や義務がスケボラやレギュラスやキリスト教殉教者のもののように大変苦痛を伴う企画を命じる場合，彼はそれを達成するために行動の自由を望まない。というのは，もし彼の心が命令を下しうるならば，彼の手はたらいの水に突込むように容易に燃えさかる石炭に手を突込むように，心の命令に従うからである。おそらく我々の幾人かはそのような英雄的な行為を決心するかもしれないが，おそらく試みには尻込みする。そこで我々はその実行に勇気が無く失敗すると，しばしば大胆に企画に参加する。そこでここでは意志の行為を指図する意志の効果がある。しかしこれは苦痛の恐怖によって強制的に反対の方向に向く。そこでここでは，たとえあるにしても，意志は自由に心の選択に従えない。しかしこの種の試みに着手するとそれらの試みはより大きい自由意志の事例とは見なされないで，より大きい徳の力や異常な心の元気と見なされる。

かくて貪欲な人が慈善にお金を払おうとするならば，しかし彼はバッグから数ギニーを取り出す際に，そのお金を手放す気持ちが無い場合，彼は寛大な行為を行う意志を持ち，もし金銭に対する愛着に制約されなければお金を差し出すだろう。しかし通常は彼を自由意志を欠いた人とは見なさないで，彼は何ものも手放す力が無いのである。かくて，我々が障害の強さや心の弱さに我々の目を向けると，我々は同様なケースを自由あるいは力の欠除と見なす。」(11)

道徳の基準は自由にある。自由を阻害するものは不道徳である。奴隷は主人の命令に従わなければならないが，その命令が嫌だからといって従わないとその行為は罰せられる。命令の不履行は自由意志の行使ではない。

蜘蛛の巣に捕えられた蝿は手足を拘束されて蜘蛛の餌になる。しかし人間が蜘蛛の巣に出会っても，手で払いのければよい。これは力の行為である。力は蜘蛛の巣を破壊する。蝿は無力である。

けちんぼうは寄付をしたがらない。これはお金を手放す力が無いのであり，自由意志を欠いた人とは見做されない。

「12. 自由で必然な機関に関する多くの瞑想的な議論は俗悪な人の間では使用されない用語であり，用語の不足によって何ものも失わない。というのは，もし自由な機関が何かを検証しようとすれば，我々は行動が意志行為に依存するということだけがわかるからである。したがって人は自由な機関である。というのは，彼の手足は彼の意志の指図に従って動くが，必要な機関として重要であり，意志を持たず，意志に与えられた動きや衝動のお陰でのみ動くからである。

地面に激しく押し倒されると彼の転倒は必然ではなく，それは正しくは彼の行動ではない。というのは，彼は転倒によって怪我したと言いがちであるが，これはよく考えると彼が行ったことであり，怪我を彼のせいにしないからである。しかし彼を倒した人のせいにする。という

のは，この場合彼の行動は体の動きに似ているからである。これは適切には行動するとは言わないで，体を動かした他のものの行動を伝達しただけである。石が壁に当たる場合，石は石が投げられたエンジンの力にとって輸送手段としてのみ役立つ。また石が動いたりはね返りや原動力の力。逆に彼が結果を意図しようとしまいと，彼の行動を引き起こす最初の衝動を与える自発的機関にたどりつくまで一連の原因と結果の中でそうである。もし人がもう一発撃つと，弾丸によって受けた傷は彼の行為である。彼は殺人の罪で告発される。あるいは，もし彼が烏を撃ちたまたま人を殺してしまったならば，彼は罪を犯したことにはならないが，殺人は彼の行為であり，意図しない偶然の行為である。そこで我々が通常力を体のせいにするならば，それはその力を力が最初に生じた原因のせいにできないからである。

その問題に関するこの見解に基づいて，我々は次のように見る。つまり，自由な機能は自由に関する問題とは関係ない。というのは，一方の自由が他方が取り去られた後も継続するからである。監獄に監禁された人は彼が動けるような自由な機能を維持する。もし彼が喜んで外国へ行くがドアがロックされていることがわかっており，じっと小枝細工の椅子に座っていると，彼が動きがとれないのは自由な機能の行為であり，彼が座っている椅子の機能には似ていない。というのは，彼は彼が立ち上がろうと思えば立ち上がれたのであるからである。あるいは彼は動かなければならないが，ある力で肩を押さえつけられると足の自由はまだ自由である。というのは，彫像が同様に押さえつけられると，動かさなければならないが，顔から倒れるにちがいないからである。

かくて我々の力がいかに縮小されたり限定されても，我々ができる残されたものがあり，我々の自由な機能は全般に継続する。というのは，これは我々が実行するつまり実行を決意する諸行為の実行方法にのみ関係しているからである。その結果あらゆることにおいて人は強制によるものであれ，自由な選択によるものであれ，正しく彼の行為であるものを行う。彼はその場合自由な行為者であり，別言すれば彼が行為者である時はいつでもそうである。」(12)

人は自由な機関である。だから人間の行動は意志行為によるものである。しかし人が誰かに倒されると，その行為は自ら行った行為であるから意志行為と言えるかもしれないが，外的強制力によって倒されたのであるから，意志行為とは言わない。

「13. しかしこれらのことは全て好奇心のある人を満足させない。というのは，彼らはさらに彼の力を働かしたりそのような力の特定の行使を決心するために自由な力を持つかどうかを尋ねるからである。さてこれは我々がこれまで話してきたことからもう一つの行為がある。その区別のためにそれを自由なVolency（というのは，瞑想者はお互いに必要に応じて言葉を作ることが許されるだろうからである。）と呼ぶ。かくて問題は人が自由な行為者かどうかでなく，自由なVolentかどうかである。というのは，彼の行為は同一であるから，彼の行為がこの後者のものがどのような法則に従おうと彼の意志行為に従うならば。

さてこの題目に関する問題を提起するために我々の意志行為が検証中の意志行為の外に意志に先行したりその他の行為の結果であると想定するにちがいない。しかし我々はこの仕事の進展過程で次のように見てきた。つまり，意志は，意志自身の作用の問題ではなく，時おり現状の判断や想像に応じて交替して働く。したがって

自由という通り名は肯定されえないし否定されえないし，とにかくVolencyに適応されえない。これは直接に我々の力の行使によって生まれない。これは正しい。我々はしばしば前もってやりたいことを決め，それに従ってその方策を遂行する。もしそのような決定が無ければこのことは省略される。この意味で意志は自ら行動する。しかし意志は次第に動機に役立つので，記憶や想像力に基づいてそのような考えや決心や性向を固めることによって間接的に行動する。意志の働きは明らかにそのような考えを心に刻みつけることに終わる。というのは，そのような考えが頭に浮かんだり，たまたま何かが決心を不都合にさせると，我々は意志の働きに反して行動するが，最初の決定やそれに続く意志行為において我々の自由な行為に関して何の疑問も生じないからである。

その他に幾つかの我々の行為はある意志の働きの余地を残してくれる。道路の角を曲がる人が誰かが彼に向かって急いでやって来るのを見ると，あわてて後退りする。ここで彼の意志の最初の行為は，その際彼が手足を動かすことである。そこで自由という用語が適用される前もっての行為はない。

二つの共存する意志を持つ人がいる。活動的意志と選択的意志である。どんなに正しく検証しなくとも後者は常に前者を指図する。しかしこの想定に立つと，人は自由な行為者であり，自由なVolentである。というのは，自由な行為は彼の行為を意志の力に依存させ，自由なVolencyは意志の力を彼の選択に依存させるからである。しかし彼にまた選ばれた自由人という称号を与えることはできない。というのは，意志を決定するものを決定するもう一つの選択を想定するほどにみごとに糸を紡ぐ人がいるとは聞いたことがないからである。選択の力を持つ人は全て，意志に先立つ行為やその他の行為が何であれ，全ての場合動機に依存したり，自ら動く独立の存在である。かくて自由という用語は行為に適用できない。というのは，行為を生み出すために行使された意志の前もっての行動に続いて起こるだろうものの中にのみ我々は自由であるからである。

自由な選択と強制された選択に関してしばしば通常の会話が交わされる。しかしこのことは，選択の結果に関係するものであり，選択の結果に関係するものであり，選択の方法に関するものでなく，選ばれたものを手に入れるように選択できることには依存しない。不可能なことは実行できないから，手に入らないものとわかると選択の自由がないと言われる。というのは，どんなに望んでも実行可能なものに対する現在の理解無く決心することはできないからである。しかしこれは，達成されない目的は全く目的ではないから，意志行為が想像できる最終的原因に依存することを立証する。

というのは，それは我々の努力が終結するものではなく，心は心が懐く力によってその意志行為を起こさせないからである。その上その選択は通俗の理解では疑いなく強制に陥りがちである。我々は選択において限定される無数の事例に毎日出くわしている。これはこの意味で選択がたった今話していた選択能力とは異なるものであることを示す。そのために，その力の保有者は人間の性格に固有の特権として主張する。これは我々から何も奪うことはできないし，外的力や状況を支配できない。しかしいかに我々が行動を抑制されようと，決心の力を常に持っている。」(13)

意志行為には自由な意志と力が働かなければならないが，自由な力をタッカーはVoleneyという造語を用いて説明する。決心しても自由な

力が働かなければ行動が起こせない。この場合Volencyが無かったということになる。Volencyには人間の決心に伴う力の自由な行使が伴わなければならない。

Volentという造語には自由な力の行為者という意味がある。人間はその力を持っているがいつも自由に行使できるかと言えば，そうではない。様々な外的要因がこの力の働きを阻止する。意志と力が共同して働くことによって初めて意志行為は達成される。

前方から馬車が来ると人は意志と両足の力によってこれをかわすことができる。

「14. かくて言葉や言葉が配置される光を導入する機会に応じて，我々の言葉が陥りがちなそれらのいくつかの意味の変化を指摘するよう努力した。道路を作り人間の自由に関する我々の推論において，我々をからませる茨や刺を生み出すのは，この言葉の変動である。というのは，人は疑問を思いつくものであるが，知らず知らずに別の疑問に陥る前に二，三歩も進むことはないからである。そこから第三の疑問に向かい，制限なく進む。それで人は疑いなく永遠に変化する論議に関して満足な結論に到達できない。

人に警告して議論にあざむかれないように用心させなければ，それらの二，三の変化に関して前に試みられた議論には何の用途もない。というのは，議論に安定した考え方を保たせるからである。そこで議論には何の困難も見出せないだろうと思われる。したがって自由意志一般に関する議論に着手するのは間違っている。自由意志は抽象的な思索においても通常の議論においても，変化しやすい用語である。というのは，意志は常に自由であるからである。つまり我々が起きている間に意志は常に何かを行う。しかも意志は同時に一つもしくは二，三の行為に限定される。しかし特定の意志を考察しよう。問題を考察する様々な光に従って，また意志という用語によって理解されるものに従って，また意志の行為であると理解されるものに従って，意志は時々自由であり，時々力や強制の下にあり，時々意志に適応される三つのもののいずれでもないことがわかる。

しかし我々の主要な問題点に関して人間の自由と神との一致が見られる。もしコップとボールを持つ手品師のように手品を使って個々のケースを個別に考察し，個々のケースを混ぜ合わせないで，また個々のケースを変化させなければ，自由や行為や意志や選択に関して懐かれる概念は問題ではない。というのは，もしいかに幾つかの提案されたケースにおいて自由を様々に理解しても，同じ結果が常に生じるように考え方を明らかにし各ケースを払いのけることなく吟味する訓練を行うならば，産み出されうる自由の全てのケースにおいて多くの類似物を区別しなければならないからである。」(14)

自由意志という用語は変化しやすい言葉である。意志は常に自由であり，一度に二，三のことを同時に行うであろう。あるいは意志は時には自由である。つまり意志は時には力や強制の下にあり自由な意志行為が実現しないこともある。

しかし人間の自由は神の意志と一致しており，自由意志は神の願いである。タッカーは人間の自由を神の意向と一致させ，神学的功利主義の一端をのぞかせる。

「15. 刑務所からある人が放免されると考えてみよう。彼は自分の自由を取り戻したと言える。というのは，彼は自宅にいたり，気の向くままにあちこちに，あるいは北か南の外国に行けるからである。それで彼の自由は彼の行動が意志に依存することに存する。何ごとも妨げな

いような環境にいれば，彼が指図する休息や動作は意志の結果として起きる。それは，思慮ある動機であれ，空想の突然の始まりであれ，感情から来る衝動であれ，あるいは彼がそれをさいころ投げに任せるのであれ，彼が意欲のために懐く誘因に全く関係しない。各ケースにおいて彼はおもむくままに十分な自由を享受する。

さてしかし，彼がある主人の権威の下にあると想定しよう。主人は彼に家で楽しんだり，行きたいところに出歩く休暇を与える。優越者の命令が厳密には人間の自由の剥奪であるかどうかを議論しようとは思わない。というのは，命令は結果を無視する人なら誰でも従わないからである。もし禁令がそれに対して与えられるならば，彼が選択することができないという現状を容認しよう。しかしそのような禁令がないと，その上に彼に行動の自由と他の自由を享受するいかなる方法であれ選択の自由を認める。さてこの自由は前者と同様に彼の行動が選択に依存することに存する。というのは，彼に自由な選択が許されるところでは，彼が選ぶものを行うことを誰も疑いえない。彼が選択できないところでは，選択しないものを行うように強制される。しかし彼が気まぐれにあるいは知人の説得によって思慮深くあるいは馬鹿げて休暇を過ごそうと，彼の選択の原因はどうでもよい。

しかし彼が宗教や義務や彼を一方的にせきたてる大きな遺産を残してくれる親類に対する尊敬という強力な理由を持つと想定しよう。しかし彼の仲間や彼自身の快楽の気質は彼に酒場へのもう一つの気持ちを懇願する。そこで誰も妨げる権威を持たない。そこで彼はそれらのもののいずれかを選ぶ自由を保持する。というのは，彼は彼の意志と選択が指図するに従っていずれかの道を選ぶからである。いいえとあなたは答える。彼が選択の自由を持っているということは明らかである。というのは，彼はやりたいことを行うことができると認められるが，彼が自由に選ぶことには疑問が残るからである。その理由は，彼の酒びたりの悪習が彼の意志の有無にかかわらず選択を強制することにある。私の友達には迷宮における迷路には注意して下さい。というのは，我々は今別の小道に逃げ込み，以前に熟考したものから異なる疑問に着手するからである。

通常のしきたりでは自由を無差別に自由によって達成された能力や行為に適用する。というのは，選択は何ごとも妨げない場合自由であると言えるからである。しかし選択によって選ばれたものは何でも実行できる。そこで行為は我々の選択の結果として生じる場合自由であり，その実行を我々に強いる強制の場合自由でない。自由を原因や結果と見なそうと見なすまいと，混乱した最も危険な力の一つは我々の研究において自由な力に関して区別の不足から生じる。というのは，我々が自由を二つの光の中で見るなかで，それは余りにしばしばなされるので，我々は論点をどこに見出すかを明らかに見定められないからである。習慣の普及がそれに反対の偏見を与えなければ，現在疑問を述べるところによれば，我々はそれを結果として，また彼の選択に影響を与えなければならない力の適切な対象として考えなければならない。

抑制の場合に関しては彼らは何ごとも我々の主たる目的に導かないだろう。したがって，用語の現在の意味における選択の自由を我々が想定する能力の結果と考えるそのようなケースを考察しよう。」(15)

刑務所から釈放された人は自分の意志に基づいて自由に行動できる。何ら行動を妨げるものがなければ，人間は意志に基づいてまた気の向くままに行動する。

主人の命令によって従者は休暇をもらう場合，彼は自由な意志の選択を行える。彼は自分のやりたいことを自由に選べる。

しかし，酒癖の悪い人は，いくら遺産を残してやろうとしても義務や道徳を守らない。酒乱には遺産を残してやるもんかという意志が働くものである。

「16. 午前中に昼からどのように過ごそうかと考えている人を想定しよう。彼の途上には何の突発的な事件や障害もなく，優位者の権威も，考察中の問題において障害となる法律の抑制や義務，名誉，義理もない。そこで彼の午後の行動は彼の意志と選択が指図するものであろう。しかし彼をむしろ他のものよりも一方のものにかかわらせる強い性向や機能する感情はない。そこで彼は午後をどのように過ごすかについては無関心である。彼が意志の現在の行為によって午後の行動を決定するまでは選択しない。

これをそのケースの哲学的説明として提供しないが，我々は確かにやがてやろうとすることを行おうとしたり，選ぶ状況において（それが問題とならないのはいかに正しくとも）しばしば考える。というのは，あなたが午後に公園を歩こうと友人に頼む場合，彼がいかめしくよろしいですと答えるならば，私は現在の時間が我々の力の中にのみあるので，あなたに告げることができないからである。私の将来の行動は私の将来の意志行為に依存している。意志は自ら行動できないし，私が5時間後にしようとすることは私の現在の選択の問題ではない。彼はあなたを冷やかしたとあなたは考えるだろう。そしてあなたは何とも歩くことを決心できないと叫ぶものである。あるいはほっておけば，あなたが歩くかどうかを私にあなたは告げることができないのか？

したがって，全ての人々の言葉や概念に逆らう無理強いの中で語ることがなければ，我々の前にあるケースにおける人は完全な選択の自由を持っていると認めなければならない。しかしこの自由はどこに存しているのか？　彼の選択能力を阻止する全ての障害や抑制，権威，義務，強制があれば，どこにあるのか。そこで彼の選択は彼が能力を保持する限り続くだろう。彼の午後の行動は彼の現在の決定に従って正確に生起する。彼に散歩よりも乗馬をあるいは両者よりも在宅を選ばせる動機や原因と関係するものは何もない。

しかし我々はまだ行っていない。というのは，我々の意志行為という能力と共存し，我々の肉体的能力の現在の行使におけるように今後行われなければならないことを選択する上で意志行為を決定する選択能力を主張する人がいるからである。彼らはそれを持つだろうから，そうであろう。そこでこの選択能力の自由は選ばれるそのような決定を行う意志に反する全ての強制や障害を取り除くことに依存し，そのような選択の原因には全く依存しない。さらに次のものを加えよう。つまり，我々が前もって選んだり決定したことを行う時，誰も実行の時に行使された意志行為における我々の自由を否定しないだろう。このことは自由が原因となるものと一致することを証明する。というのは，さもなければ我々の選択や前もっての決定は，我々の将来の行為に役立たないし影響も与えないにちがいないし，またそれらが完成されるまでそれらに対して順応して行動を強制して意志に強制力を与えるにちがいないからである。」(16)

午前中に午後から何をしようかと考えている人にとって，仕事とか待ち合わせとか何の用もなければ，何でもやろうと思えばできる。自由な意志の働きによってやりたいことを選択でき

る。しかし現実は何か用事ができて自分の意志行為が実現しないものである。

「17. かくてお互いに指図する心の中でいかに多くの力を感じても，自由に関する適切な真正の概念はそれらの力の各々に関して同様であろう。というのは，自由の特質を議論するために我々はある機能する力を原因として考察し，実行された能力の行使を生み出された結果として考えなければならないからである。もしそのような結果が原因から期待されるように生じるならば，我々は機能する能力において自由である。しかし異なる結果が生じると，我々は強制や抑制の下にある。

もしさらにこの機能する能力を自由に使えるかどうかを尋ねるならば，これは機能する能力を結果としてまた以前には原因として考えられない他の力として考えて，同様な方法で前者と議論されなければならない新しい問題である。

心が前もっての決定や共存する選出によって，自ら行動する多くの能力を持っているとすれば，そのような心の行動は手足に働きかけるような多くの行為である。心の自由は同じルールによって試みられるにちがいない。というのは，私の意志が命令する方法での私の肉体的力の使用に反する障害がない限り行動の自由があるので，どのような原因も私をして特定の方法で肉体的力を使用させるからである。そこで何の障害もないところでは意志の自由がある。しかしどのようなものが決定や選出に機会を与えようと，そのような意志行為は，前もって決めたり選定するにつけ，生じるものである。というのは，自由は，その自由を研究する能力の働きに先行するものとは無関係であり，その働きの後に生じるものと，そしてそれが効力を現わすのを阻止する全ての障害の除去と関係するからである。したがって，自由はそのような機能に先立つ原因と一致し，それらの原因がその処置の下にある神意の主権と一致する。

かくて決定された問題点，つまり行動や決意の述べられたケース，に関して論争者の立場を守りうる限り，彼と十分うまくやっていける。しかし人は任務に関して言を左右にしがちであり，それらの用語の使用において彼ら自身を理解しないで，あるいはそれらの用語の区別を設定することなく好きなように決心し，決心すると選択すると主張する。しかし一時的にはそれらの用語は同義とみなされ，次の時はお互いを生み出す異なる行為とみなされる。ところが実際は選択の意味を前もっての決定に限定すると，我々の決定がある限度内に限定されたり，我々が決定するものとは反対の道を強いられる場合には，我々の意志行為は，そして結果として我々の行為はそのような強制や抑制に適用する原因に依存する。しかし我々が決心するものは何でも完全に自由に実行できる場合，それらのことは我々の判断に生じる動機や決定を下す際の想像力や我々の心の状況を形成する際の以前の配慮に依存する。あなたが最初の決定に至らなければ，あるいは前の他の行為がなかった心の行為に至らなければ，それらの配慮は同様な原因に依存していたし，意志が関係する限りそうであった。その行為は外的な原因に依存するにちがいない。その結果全ての次に起こる意志行為はそれに依存するにちがいない。」(17)

意志行為には自由な力の発揮が必要である。自分の能力を自由に使用できるところでは何の抑制や義務もない。自由な心の働きは自由な力の選択を促す。自由は力や行動の原点であり，神意と一致する神の意志でもある。

決心とは意志行為の出発点である。自由な心の中で考え抜かれた決心には何の強制や抑制もない。決心した予定の行動は外的なまた内的

な障害が何もなければ実行に移される。しかしちょっとした風邪や痛風が生じても，また少しの靴擦れが起きても予定の行動は実行に移されない。

「18. 同時に存在する選択能力に関してそれは，外的な対象物や判断や想像力の動機や我々自身の前もっての決定が何であれ，自ずから働き全ての原因に依存する。もしこれが一度うまく構築されると，全ての慎慮，熟考，我々自身の行為や他人の行為への依存から決別する。というのは，もし私がその後全ての理由や性向，前とは逆の解決策を無視して最も狂気じみた途方もない行動をたまたま選択するならば，私の心に有益な格言をたたき込むように，また名誉や義務や私の指針のための道徳感覚の諸感情を養うようにどんなものが私の方策の計画を賢く工夫するのに有効であろうか？　あるいは，友人が頭の中の全ての判断と指図，心の中における感情と願望に反して彼が選ぶ危険物があるが，私の最良の優しい友人は私を殺さないだろうということに私はいかに依存しているか？

しかし，選択能力のある熱狂的帰依者がいないこれらのもののような恐怖がある。これらのものは彼らの性格に一致して人々の行為に依存する。もし彼らが無情な悪党を知っていれば，機会が彼らの将来の行為における正しいそして賢明な選択を行うために役立ち，本来信頼できる時はいつでも，彼らは彼の暴力，傷害，不正の選択行為に関して何の問題もない。

そこで人と人との間の違いを引き起こすのは何か？　というのは，道徳的性格を持つ原因があるにちがいなく，各人が彼の選択能力でどんな動力をもたらすかを我々が何故知っているかということが与えられる説明があるにちがいないからである。彼らが言うが，その違いは意志自身に存する。その意志は特有の傾向や性癖を持っており，あるいは私はそれが何か知らないが，別人の意志とは異なる。悪党は邪悪な意志の持主であり，したがって常に悪意に満ちた選択をする。そこで彼らは彼ら自身正直な意志を持つ。もちろん彼らは正しく賢く選択する。しかし，私は彼らの意志が何なのか知らないが，どうして彼らがこれを手に入れたのか？　それは生来のものだったのか？　それは彼らの心の自然的気質だったのか？　そこで彼らは彼らの性格の創造主を祝福しなければならない。その創造主は彼らに彼らを創造する際にこの幸福な気質を与えた。しかしそうではない。これは事実ではないにちがいない。というのは，もしそれが彼ら自身の手に入れたものでなければ，彼らは彼らの正直の全ての利点を失うだろうから。したがって彼らは先の用心，勤勉，彼らの選択能力の正しい管理によって彼らの意志自身にこの正しい性癖を与えた。そうであれ。というのは，我々は彼らが喜んで引き受ける全てのものを認める気分であるからである。なお我々は尋ねなければならないが，何が彼らをそのような正しい管理に動かしたのか？　それは彼らの意志の傾向ではない。というのは，もしこれが取得されると，彼らはそれを取得する前にそれを取得できないし，その取得において取られる正しい方法の選択をそこから引き出せないからである。そこでいかに彼らは単なる偶然によってそれらの方法にふと出会ったのか？　私は彼らがこういうのを疑わない。というのは，これは徳を好評あるものにするから，その徳は一人の馬鹿が別の人と同様に出くわすものであるから。そこでもし彼らの選択が源泉となるならば，我々は推測するが次のもの以外のものはない。つまり，教育，模範，仲間，体質，心的構造の状態，彼らを取り巻く対象，彼らの注目に触れる出来事や同様なこと。つまり，選択す

る心に対して先行する外的な諸原因とその力の指図の下で，彼らは外的全てのものを統治することを知らなければならない。」[18]

意志行為における選択能力の問題は様々な外的および内的要因にも依存している。心の中における選択行為は時には感情や願望に反して危険なものを選んだり，逆に義務や恩恵に影響されて安全なものを選ぶ。気まぐれな心のうつろいの中で道徳感覚は当人の選択方向を示唆し，邪悪の心の小悪魔はよからぬ選択を暗示する。

心の働きには明確な指針がない。ある時は名誉欲から市長選挙に出馬し，ある時は守銭奴になって儲け話に飛びつく。後から考えると，しまったと思うことの連続である。この人間の心の働きが通常の人間の行動パターンである。

「19. 概して自由をどのような光の中に置いても，自由をどのような実際的あるいは空想的力に適用しても，自由がその力の行使に我々を動かす前もっての原因の働きに矛盾しないし，それらの全ての原因や自由になるそれらの原因を有する神の統治権に矛盾しないと結論する。かくて神の計画はわずかでも我々の自由を犯すことなく功を奏する。我々の判断や欲望が我々を誘って生み出す出来事は，我々の能力の外に置かれ，他の行為者の手中に任せられ，我々に関して必然的に実行される。夏と冬の繰り返しは我々の選択に依存しない。というのは，我々は永遠の春を選びたいからである。しかし神がどこにおいても彼の計画のどの部分の実行においても我々を雇うことが適切であると考えても，我々に能力，才能，機会，必要な動機を与える必要がある。我々は我々の自由の行使によって我々に割り当てられた方針を完成させる。

人間の感情，願望を見通し，自由に使える適切な対象物を持てる限り，彼をあなたが要求する仕事に就かせる。お金が彼の偶像であり，あなたが彼を買収するのに充分なお金を持っていれば，あなたが喜ぶどんなことも彼にさせるだろう。もし彼が彼の貪欲を彼の神に変えるならば，激しい享楽によって彼をミルバックからラドクリフハイウェイに引っぱって行くだろう。あるいはもし良き性格が彼の支配的原理であれば，あなたが欲する用務に彼を雇えるだろう。あなたの政治家は人々の感情をいかに彼らの計画に役立つために彼らの権威に依存させるかを知っている。神聖の政治家が全ての人の心の秘密の部分を完全に知っているばかりでなく，彼が秘密の部分に彼らの行動の色を決定するあの理解力とあの欲求を与えたので，彼はこれをより完全に行えるだろう。我々は彼が彼らに彼らによって意図された目的に効果的に答えるようなものを与えたことを疑う必要がない。

人々の心を知っている二，三の事例において我々は我々の手中にある肉体的道具を用いてできるだけ確かに彼らとともに我々の目的を達成できる。もしあなたが舞踏会を催し，享楽を与えたいならば，これはこれらの娯楽好きの人々に案内状を送るものである。たとえ彼らを支配する絶対的君主の権威を持てたとしても，あなたは仲間の自由な選択に任せるだろうし，彼らにより効果的に仕向けることができない。かくてこの事例においてあなたは彼らの自由に関する問題なく彼らの行動を左右し，ヒックフォードやバー寺院の近くのアポロやあなたのダイニングルームに向かわせる。我々には我々の眼前で君主に関する現在の事例がある。君主は彼の臣民の愛を受け，彼らの自由なサービスによって最強の専制的力の結合した努力に抵抗しうる。専制は自由意志の助け無く大事業をなしえない。というのは，報酬，名誉，勇気，自由な働きをするそれらのエンジンは処罰のむらや下

された断固とした刺令以上に軍隊の勇気により多く貢献するからである。というのは，それらは我々の意志であるからである。

そこで，人は自由の計画を達成するために自由を最大限に利用できるということを経験が証明してくれるので，何故神の名声をより広い範囲で考えることをためらうのか？　というのは，彼は行為の源泉に触れる彼の能力の中の全ての対象を持っているばかりでなく，源泉自身を作製し，源泉が捉えるいかなる接触も対象に受けとめさせたからである。

しかし我々は神の仕事を我々自身の狭い手順によって判断する。その方策が我々の目的に正確に合致していてもいなくても，我々の方策の便宜さが我々の考えの中に生じ，我々が前の素材や道具を利用しなければならないので，我々は時々我々の方策を採用する。たとえ我々の道具を用いても，道具を用いて何を作りたいのか必ずしもわからないが，我々はしばしば道具が我々のサービスにとって不便であることがわかる。昨日達成した仕事はしばしば今日達成する仕事の途上にある。というのは，我々が従事する新しい計画や機会は永遠に我々に生じるのであるから。

同様に通俗的には我々は神が時おり行動し，環境の共働が目的を便利にするまで彼が以前に考えなかった目的に着手することを想像する。我々は彼が自由な多数の人種を広い世界にばらまき，彼らが生み出すものを正確に知ることなくあるいは取り扱うことなく，彼らに多様な能力，才能，好み，性格を授けたことを理解する。我々は，彼が計画の主要なラインを形成したが，たまたま充足されるべき大きな隙間を間に残したことを認める。彼らの粗野な作業は，彼らが彼の一筆を妨害する場合彼らの道程をそらすべく彼の支配の下にある。というのは，神の目は人間の行動を観察しているからである。彼が彼らが彼の計画に反対するのを見る時，また彼が彼らを受け流すか彼らを計画とともに協同する彼の秘密の影響力によって導く場合。

さて人間の間で多様な気分や調和のない目的や関心を考察すると，次のことが認められなければならない。つまり，世界の統治は，この見解において問題の行動において継続的に奇跡的な介入無く，あるいは自由な行為に対する強制や抑制無く，とり行いえない。それが我々の前にある動機から生ずるよりも我々の意志行為に別の変化を与えたり、我々の現在の意志行為が自然に生み出す以外に我々の手足や思考の中で生ずる他の動作を引き起こす。

しかし，何ごとも避けられないまた何ごとも困らせたり荷を負わせすぎない神の無限の知恵と全能を思い出す時，機会のいわれないめぐり会わせは，全能者によって最初に働かされた作因と原因から生じなければならないことをよく考えると，次のことは想像しうる無限の貢献とより調和するように思われる。つまり，彼が与えた能力と行動の唯一の，また非常に遠い結果も看過されないし，隙間や空の空間の形成において彼は，その継続期間中に続いて起こる全ての作用に関する十分で完全な計画を設定した。

そこで，どのような干渉があるか（というのは，私はその頻度やまれなことに関して誰をも彼自身の意見に任せるので），またその干渉がいかに多く我々にひそかに働きかけるかということは，見えない危急に答えるべき急な方便ではなく，初期の計画に含まれていた。このことは，彼がそれに適応するように予定した時，そしてその場合，そしてしばしば，彼の干渉する手を必要とするように故意にこしらえられていた。しかし彼がそれらを実行するために彼の道具として我々を用いることを適当と考えたその

部分で，我々の能力の行使において我々を支配することは，それらの計画の達成にとって選ばれたそれらの原因の作用を妨げることによって彼自身の計画をだめにすることである。

かくて彼は天と地における全てのものを能力と知恵の共同によって支配する。必然性と衝動による事柄，感覚と本能による獣性，彼の意志の表意による上記の恵まれた精神。彼らは喜んでかつ自由にこれらを達成しようと準備する。一部は彼に影響を与える必然的行動による，一部は彼を支配する法律，制限，危害に対する憂慮による，一部は彼に割当て理解力や好みの割合に従って彼を自由な選択に任せることによる，人間。」(19)

自由は神の統治権と矛盾しない。神の計画は少しも我々の自由を侵害することなく遂行される。神は我々の自由な行動によって自らの計画を完成させる。

舞踏会に来てもらおうと思えば，できるだけ魅力的な内容を盛り込んで案内状を発送する。専制君主のように決して参加を強制してはならない。あくまでも自由意志による参加が望ましい。自由参加は神の意志であり，多くの参加者が集まることが神の計画でもある。参加を強要することは神の計画に反する行為である。

注

(9) Abraham Tucker, *The Light of Nature*, Vol. II, Part III, T. Payne, 1768, pp. 162–4.
(10) *Ibid*., pp. 164–8.
(11) *Ibid*., pp. 168–170.
(12) *Ibid*., pp. 171–3.
(13) *Ibid*., pp. 173–6.
(14) *Ibid*., pp. 176–8.
(15) *Ibid*., pp. 178–81.
(16) *Ibid*., pp. 181–3.
(17) *Ibid*., pp. 183–5.
(18) *Ibid*., pp. 185–8.
(19) *Ibid*., pp. 188–94.